

送り出したのは、APUという名の世界でした。

立命館慶祥中学校・高等学校 副校長 蔭山 成利



4月にAPUへ出向いたとき、偶然、2回生の港まりなさんに会うことができました。少し時間をもらって、大学での様子を尋ねてきたのですが、その間、ひっきりなしに、さまざまな肌の色の、さまざまな風貌の学生が、さまざまな言語で彼女に挨拶をしていきます。わずかなインタビュー時間の中で彼女が話題にした友人の出身地は、インドネシア、タイ、中国、台湾、ネパール、ガーナ、韓国、カザフスタン、フィリピン、バングラディシュ、スリランカ、シンガポール、ブルガリア、ハンガリー、アメリカ、と列挙するのも疲れるくらいの数です。1年余りの間に、彼女が世界と人的ネットワークを構築していることがわかる出来事でした。

彼女も含めて、APUの学生は、とてつもなくよく喋ります。前の話が終わるのが待ちきれないように、自分の近況を語ります。うるさいくらい喋ります。話が尽きず、その場を切り上げることができません。それは、自分の学生生活がいかに充実しているか、APUでの日々がいかに刺激的か、とにかく伝えずにはいられない、言葉のエネルギー噴火のようでした。インタビューの最後に、「APUより歴史や知名度のある大学ではなく、APUに進学したことで、将来に不安も感じることはないのか?」と、世俗的なことを尋ねてみました。即座に、「今の就職活動では大学名よりもその人のスキルとか経験、人柄が重要だと思うので、まったく不安はない。」と世俗を超越した自信に支えられた答えが返ってきました。



港まりなさん

第1回 高校生国際フォーラム開催

“Learn to share, share to learn”

February 18th - February 22nd 2011

International Student Forum

2011年2月18日（金）から2月22日（火）に世界の国々から高校生を招き、平和と国際理解をテーマとした「高校生国際フォーラム」を5日間にわたり開催いたします。「ポジティブなグローバル化」に焦点をあてて、テーマに沿って議論を交わし、プレゼンテーションを行います。また、文化交流会、京都市内観光、広島平和記念公園等を訪れ、歴史と平和、そして相互理解を深めます。

■お問合せ先／立命館宇治中学校・高等学校 〒611-0031 京都府宇治市広野町八軒屋谷33-1 TEL.0774-41-3000



附属校生が大学進学を考えるために

立命館アジア太平洋大学 副学長 平田 純一



立命館学園の高等学校で学んでいる皆さんは、大学進学を考える上で、有利な面と不利な面があります。大学入試に備えた受験勉強の必要がないという意味では有利ですが、立命館大学と立命館アジア太平洋大学（APU）のどちらかの特定学部（学部によっては学科）しか選択できないという意味では不利かもしれません。立命館大学とAPUとは全く性質の違う大学ですので、立命館大学の13学部とAPUの2学部の合計15学部から1学部を選択するというのではなく、まず立命館大学かAPUかを選択し、その上で学部を選択していただきたいと思います。

大学生が大学生活の中で最もエネルギーを使い、真の意味で勉強するのは、就職活動の時期であると言われます。立命館学園の各高校で学んでいる皆さんには、大学生が就職活動に使うのと同様のエネルギーを使い、必要な学習をして進学先を決めていただきたいと思います。

将来のキャリア形成の視点から、大学あるいはこれに加えて大学院で学ぶことの中身とキャリアを直結して考えることができ、この中身が今の時点で明確になっている人は、立命館大学の対応する学部を選択することになるでしょう。もし自分の

キャリア形成にふさわしい学部がなければ他大学を受験することが必要かも知れません。将来のキャリアのイメージが描けている訳ではないが、日本社会を中心にしてキャリア形成を考えたいのであれば、立命館大学の中で学習内容に自由度の高い学部か日本の企業に就職して、必要となる基本的な素養を大学教育によって身に付けることのできる学部を選択することになるでしょう。これに対して、日本に軸足を置くが世界を相手にしたキャリア形成を考えたい、あるいは将来は海外に出てキャリアを形成したいと考える人は、APUで学ぶことが最適であると思います。以下の先輩方の説明にもあるように、APUでは入学時から、国際人として活動するための訓練が行われています。APUで学ぶことの大きな特徴は、教室で学ぶこととAPUの国際環境で生活することが表裏一体化しており、教室での学習が単なる学習に終わらないことです。APUで学べる専門の範囲は立命館大学に比べると少ないかもしれませんが、幅広い社会・人文科学分野の基本的な内容はAPUでも科目として十分に提供されていますし、交換留学等を活用して、自分の専門性を鍛えることも可能です。現実問題として現在日本の大学で専門性を身に付けるためには、大学院で学ぶ必要がありますが、APU出身者には海外の大学院で学ぶ可能性も高くなっています。

どの大学、どの学部で学ぶことになるかは皆さん方の選択です。入学後に後悔しないために、自分自身の持つ特性と将来のキャリア形成、大学や学部で学ぶことの中身を徹底的に勉強して真剣に選択されることを望みます。

自分の頭で考え、価値観を明確にすることが大切です。

久保元 宏（立命館高等学校出身） アジア太平洋学部 2004年3月卒業 佐川印刷 勤務

「APU 進学理由」

内部進学「何となく大学に進学できてしまう」という環境下において、自分自身の進路に疑問を持っていた中、APUの開学を知りました。学生の半分が留学生という日本でも珍しい環境の中で、しかも1期生として学べるということは自分の人生にとって、大きなチャレンジになると直感的に感じたことが一番の理由です。また、国際的な事柄に関心があったことやAPUのカリキュラムに魅力を感じたことも進学理由として挙げられます。

「APU での学生生活」

開学して間もないAPUには、どの大学にでもある学園祭というものはありませんでした。そこで、仲間と学園祭実行委員会を立ち上げ、様々な全学イベントを開催してきました。主に宣伝・広報を担当し、どうすればもっと多くの人に来てもらえるかを考え続けた4年間です。APUの学園祭として定着している「天空祭」は、私が4回生の時に第一回を迎えました。これは学生生活4年間の学園祭活動の集大成であったと言えます。

「社会人となった今、APU での経験がどのように活きていると思いますか？」

APUという大学を一言でまとめると、「多様な価値観・アイデンティティがぶつかり合う場」と表現できます。そうした環境下で学生生活を送るには、「自分の頭で考え、価値観を明確にすること」が大切になります。社会には様々な価値観が存在し、それらとぶつかり、時には流されることもあります。APUで得た経験は、迷っている自分に「自ら考え、行動し、答えを導き出す」ことの大切さを語りかけてくれます。



自分が動けば何かが変わることを教わりました。

赤井 志帆（立命館高等学校出身） アジア太平洋学部 2010年3月卒業 STAトラベル 勤務

「APU 進学理由」

実はAPUと国際関係学部の間で悩んでいました。何をポイントに決めれば良いのか。ネームバリュー？人気度？そんな事を悩んでいた事もありました。でも最終的に私がAPUを選んだのは、両方のキャンパスを自分の目で見た上で、私が楽しそうに笑って立っている姿を想像できたのがAPUだったから。国際関係を科目として学ぶのではなく、国際関係の中に身を置ける。それがAPUであり、そこが楽しめると思った理由だと今では思います。

「APU での学生生活」

私にとってAPUでの生活はインターナショナルで刺激的なものでした。自分が動けば何かが変わる。「自分から動く姿勢」と「独りでは成せない」ということを様々な国籍の友達、教授、事務の方々から教わりました。4年間のうちの半分をヨーロッパ留学で過ごし、それでも4年間で卒業できたのはAPUだったからだと思います。入学を決める際にAPUなら充実した楽しい学生生活を過ごせると感じたのは間違っていなかったということですね。

「社会人となった今、APU での経験がどのように活きていると思いますか？」

現在、社会人となり1年近くが過ぎようとしています。APUでの経験から得た「新しい環境への順応力」と「常に先を見据える力」というのは新人時代を乗り切るとても大切な要素だったと思います。そんな中、一歩間違えれば順応力とは反対の性質になってしまう「自分を持つ」というのもAPUでの時を経て上手くバランスを取れているように感じます。まだまだ社会人と呼ぶには未熟ですが、これからも笑顔忘れず精進出来るよう頑張ります。



そして今も私は学び続けています。

小林 綾子（立命館宇治高等学校出身） アジア太平洋学部 2006年3月卒業 Google Singapore 勤務

「APU 進学理由」

進学を決める際に、重要視したのは国際性です。漠然と海外や国際関係に興味があり、学部を選ぶとすれば国際関係学部かな。と思っていた時、APUの学生がとても積極的にさまざまな活動に取り組んでいるという話を担任の先生から聞きました。私はその話にすごく興味を持ち、週末にAPUのオープンキャンパスがあったので参加しました。バイリンガルの環境、多国の学生たちが精一杯学生生活を楽しんでいる姿をみて、是非この多文化・多国籍の環境の中で彼らと学びたいと思いました。

「APU での学生生活」

APUでの学生生活は、毎日がカルチャーショックでした。たくさんの国際学生と生活をともにし、寮内では、キッチン・ロビー・pcルーム・スタディールーム・お風呂など、本当に家族のように親密な付き合いができ、その中で相手の文化や言葉を肌で感じ学びお互いに、まさに切磋琢磨してきました。国際学生の学ぶときも遊ぶときも100%という姿勢を見て、私も積極的にいろんなイベントに参加しました。

「社会人となった今、APU での経験がどのように活きていると思いますか？」

APUで私は本当にたくさんの宝を得ました。それはきっと立命館で得られる宝とは少し異なると思います。現在の国際化社会では、いろんな環境・状況にFlexibleに対応でき、自分で考えて行動に移せる人材がもてられています。私はそれらの力をAPUで学びました。そして今も私は学び続けています。自分の今後の成長・可能性、これからどんなことに挑戦できるのかについて毎日とても楽しみにしています。



（写真左上）

感謝の心を忘れずに意見を聴くことが大切です。

平松 恒（立命館宇治高等学校出身） アジア太平洋マネジメント学部 2009年3月卒業 パナソニック 勤務



「APU 進学理由」

APUへの進学理由は、留学生の多く在籍するグローバルな環境に魅力を感じたためです。APUには世界各地から留学生が集っており、このような環境は立命館大学はもちろん、たとえ海外の大学に留学したとしても、見つけることは難しいかもしれません。私は、この異文化と接する環境に身を投じ、グローバルな環境を肌で感じることで、将来世界を舞台に活躍するための基礎を作れるのではないかと思います。APUを選択しました。

「APU での学生生活」

学生時代は大学寮の運営や統括を担うレジデントアシスタントに最も力を入れました。大学寮には900名以上の学生が集い共同生活を営んでおり国籍も多種多様でした。私は、初めて来日する留学生が円滑に生活をスタートできるように、日本での買い物の仕方やマナーの教育からイベントの企画まで幅広くサポートをしてあげることを通じて、日本を好きになってもらうように尽力しました。この結果、大学では1000人近くの留学生の知り合いができ、ネットワークが広がりました。

「社会人となった今、APU での経験がどのように活きていると思いますか？」

APUで培ったコミュニケーション能力は活きているかと思います。大学では多くの留学生と接した事により的確に自分の意見を伝えられる論理的思考力がつきました。しかし、論理的に持論を展開するだけでは衝突が生じます。そこで、大切だと感じた事は感謝の心です。相手に意見を言って貰える事に感謝すると、謙虚になれ素直に耳を傾けられます。これにより、衆知を集められ、より高い成果を生み出せると同時に、自らの見識も高められるようになりました。この力は現在も非常に活きていると思っています。

自分次第でいろんなことに挑戦できました。

余田 佳奈(立命館宇治高等学校出身) アジア太平洋マネジメント学部 2009年3月卒業 日本電産 勤務

「APU 進学理由」

APUへ進学を決めた理由は、興味があったマネジメントを学べること、そして世界中のどこにもない異文化を最も体験できる環境に身を置けるということでした。高校時代に留学し、異文化での生活で多くの刺激を受け、それがAPU進学を決意するきっかけになりました。APUは約90カ国・地域から学生が集まっているので、限られた4年間の大学生活の中で多くの文化に触れ、自分の成長に繋がるのではないかと考えました。

「APU での学生生活」

在学中に海外で働くということを経験したいと考え、海外インターンシップに参加しました。APUでは多くの授業が約2ヵ月で終了します。その為、忙しくはなりますが、前半または後半2ヶ月でフルに授業を取り、残りの2ヶ月を自由な時間にすることが可能です。この制度を利用し、夏休みと合わせてわずか3ヶ月ですが、海外インターンシップに参加しました。何かに打ち込みたいと思った時、休学しなくても自分次第でいろんなことに挑戦できる学校だと思います。

「社会人となった今、APU での経験がどのように活きていると思いますか？」

APUで得たことの中で現在最も活かされていることは、海外の人に対しても自分の意見をはっきり言えるということだと思います。APUでは、日常的に留学生と意見交換をする機会が多々あります、というより避けて通れません。そのような環境の中にいると違う価値観・文化を持った留学生を相手に自分の意見を伝えるということに抵抗がなくなります。今も海外の人と仕事をする上でとても必要なことだと思います。



写真左

人生において最も濃い友人関係が築けました。

吉澤 智史(立命館宇治高等学校出身) アジア太平洋マネジメント学部 2010年3月卒業 資生堂 勤務

「APU 進学理由」

ずばり、「振り返ったときに、悔いのない人生を送る為には」を考えた末の決断です。高校で留学した際培った英語を無駄にしない、しかも一国だけでなく世界の英語を知り、「本当の意味での共通言語である英語」を使えるようになること、そして別府という土地で一人暮らしを体験出来ることなど、他大学に進むよりもメリットが沢山あると感じられたのも大きな要因の一つです。

「APU での学生生活」

とにかく異文化にまみれた4年間でした。他大学に進学していたら有り得ないことですが、僕が大学で作った友人は日本人よりも外国人が圧倒的に多いです。アラブ人、スイス人…挙げていくと切りがないですが、それぞれの文化／宗教／価値観の枠を乗り越え、人生において最も濃い友人関係が築けたことが僕の誇りです。大学で出来る友達との関係は卒業後続かない等聞くことがありましたが、APUで出来る友達は、一生ものです。

「社会人となった今、APU での経験がどのように活きていると思いますか？」

会社では新入社員ということもあり、今現在は関東を中心に仕事をしているため、APUでの経験が活かされていると実感出来ることは少ないですが、国際的な場での活躍を期待する声を頂いております。またプライベートでは、別府から関東という新しい土地で、同級生のみならず、卒業後に会ったAPUの先輩方と交流や、世界規模のプロジェクトへ参加させて頂くことで、新たな視野の拡大に繋がっています。



「おかえり」と迎えてくれる故郷ができました。

細川 弘嗣(立命館宇治高等学校出身) アジア太平洋学部 2009年3月卒業 JTB西日本 勤務

「APU 進学理由」

私がAPUを選んだ理由は、国内外で活動するAPU学生のアクティブさに魅力を感じたこと、そして世界中から集まってくる学生と一緒に語学や当時興味を持っていた観光の分野の勉強をしたいと思ったからです。また、海外との繋がりをもてる仕事がしたいと漠然とした考えをもっており、APUへの進学はその土台づくりとしてふさわしい環境であると感じた事がその理由です。

「APU での学生生活」

APUでは、別府の魅力や注目スポットを発掘しその情報を発信していくサークル活動、そして、別府のまちを元気にする事を目的としたまちづくり活動を行う学生団体に携わり、その一環として泉都大祭というお祭りの運営を行いました。学校では海外の学生と共に学び、サークル活動では別府の地域住民と共にまちづくり活動に励んだ4年間です。また、アルバイトは別府ならではの温泉でのバイトをしました。

「社会人となった今、APU での経験がどのように活きていると思いますか？」

旅行会社での仕事の中で、別府そして九州の旅行企画・提案を積極的に行っています。お客様に実際に旅行をしていただき、九州を満喫してくださった報告を聞くのが一つの楽しみです。また、お祭りの立ち上げから携わった泉都大祭は、今も後輩が引き継ぎ毎年開催されています。仕事が大変なときも、別府のお祭りの時期を楽しみにしながら働くことができますし、いつ別府に帰っても学生時代に会った別府の地域のおじさんおばさん達が「おかえり」と迎えてくれる、素晴らしい経験ができました。



互いに協調し、学び合う事の大切さを実感しています。

梅坪 和音(立命館慶祥高等学校出身) アジア太平洋学部 2004年3月卒業 フェリス女子院大学大学院国際交流研究科 2006年3月修了 楽天 勤務



「APU 進学理由」

何よりも、恵まれた環境があったからです。一期生として自分たちで全てを始められる事、そして、世界中からの国際学生と学べる日本一グローバルなキャンパスである事は私にとって大きな魅力でした。高校2年時、交換留学でカナダの高校に1年間通いました。その経験以上のものが得られるに違いなく、日本にいながらして異国にいるのと同じ感覚でいられるAPUの存在を知った時、ここしかないと思いました。

「APU での学生生活」

1年目はAPハウスでRAを務めました。初代RA同士、深夜まで何度もMTGを重ねたのを覚えています。寮生活は刺激的で、毎日が新しい事だらけ。あそこまで濃い生活は後にも先にもこの時だけです。教授の方々も魅力的な方々ばかりでした。

ゼミでは元国連職員の教授の下で国際関係を学び、NY国連本部研修にも参加しました。教材からだけでは学べない事が多いのはAPUならではの。互いに協調し、学び合う事の貴重さは、その場を離れた今になって強く感じます。

「社会人となった今、APU での経験がどのように活きていると思いますか？」

名札、資料、朝礼、MTG、申請書、カフェテリアメニュー…今、会社の事業や人材の国際化とともに、社内公用語の英語化が進行しています。そんな環境ですが、私には全く違和感がありません。もちろん、生活の全てが国際性に富んでいたAPUでの4年間があったからだと思います。多国籍な国際学生とともに過ごした濃密な4年間で養われた国際感覚やコミュニケーションスキルが、仕事をする上でも非常に役に立っています。

共に「達成する」活動をしてきたことが自信につながっています。

浅野 太紀 (立命館慶祥高等学校出身) アジア太平洋学部 2005年3月卒業 アフラック (アメリカンファミリー生命保険会社) 勤務

「APU 進学理由」

進学時は、「英語を活用して国際的に活躍していける人間になりたい」と漠然とした理由から、大学の中でも定評がある立命館大学国際関係学部が当時全く無名だったAPUかの選択を悩んでいました。実際、両方のオープンキャンパスに参加しそこで目を惹きつけたのは、APUの様々な人種が入り混じって生活あっている未知の環境でした。「自身の既存概念を超えて、常に新しいアイデアやコミュニケーション能力を養いたい」と明確な動機ができたのが決め手でした。

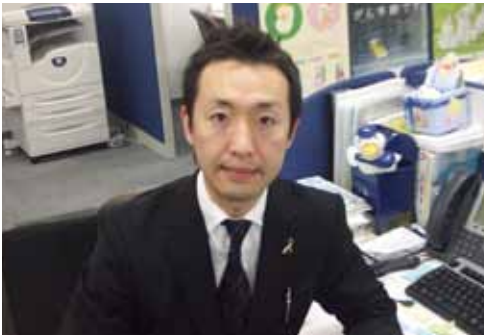
「APU での学生生活」

英語での授業はもちろんの事、その中で諸外国の仲間たちとディスカッションが多かったと思います。正解論にこだわらず主張し合う文化でしたので、プレゼンテーション能力も培われました。学生の中盤では、英国ロンドンにあるウェストミンスター大学へ1年間交換留学もできました。留学プログラムも豊富で、希望だった英国への留学は知識のみならず忘れられない経験になりました。独特なサークル活動も多く、常に新しいことを挑戦しようと充実した学生生活でした。

「社会人となった今、APU での経験が

どのように活きていると思いますか？」

多種多様な人々とコミュニケーションができるかどうかは、知識以上に重要な事だと社会人になってからより強く思います。当然、業種によっても違うかもしれませんが、APUで通常会うことができない貴重な出逢いがたくさんあったこと、そこで共に「達成する」活動をしてきたことは自信につながり社会人になってからも相手の気持ちを理解しながら主張もしっかりできる能力につながっていると思います。知識も重要ですが、通常では経験できない世界があるというのがAPUの魅力だと思います。



伝えようとする姿勢と、間違えることを恐れない度胸を身につけました。

港 はるな (立命館慶祥高等学校出身) アジア太平洋学部 2009年3月卒業 星野リゾート 勤務

「APU 進学理由」

私がAPUを選んだ理由は3つあります。一つ目は、興味のあった観光やまちづくりについて国際的な視野から学ぶことができるから。二つ目は、国際学生の勉学に対する意識の高さとそれに影響された日本人学生の向上心の高さです。せっかく勉強するなら向上心の高い学生と勉強したい。その思いを叶えられるような学生がAPUには数多くいました。そして三つ目、APUには語学を学び実用できる環境が整っていると思ったからです。



写真左

「APU での学生生活」

APUでの学生生活は、驚き、興奮の連続でした。授業ではもちろん、サークルや寮でも世界各国の国際学生とともに学び、楽しむ環境がありました。国境など関係なく、様々な国の友人同士で交流することもあるれば、時には今まさに世界で勃発した国家間での衝突や、歴史の問題で議論になり緊迫した空気になることもありました。まさに「世界の縮図」。APUだからこそ体感できた世界であると今でも思っています。

「社会人となった今、APU での経験がどのように活きていると思いますか？」

授業ではグループワークやプレゼンテーション、ディスカッションが多かったため、日本語はもちろん、外国語でのコミュニケーション能力や論理的思考なども授業を通して養うことができたと思います。また、第二言語が完璧でなくてもとにかく伝えようとする姿勢と、間違えることを恐れない度胸やチャレンジ精神はAPUの学生生活を通してかなりついたと思いますし、そうした経験が社会人となった今も役立っていると思います。

※卒業生の勤務先は2010年12月現在のものです

世界へ飛び出せ！ ～企業がAPUの若者に期待すること～

立命館アジア太平洋大学 キャリアオフィス 課長 **亀田 直彦**

今、多くの企業が世界市場を意識したビジネスモデルの一大転換期を迎えています。国の成長と豊かさを願い、未来志向のエネルギーで満ち溢れているアジア、中東、そしてアフリカ諸国等の市場へ飛び込み、ビジネスという側面から国作りに携わる日本人駐在員が沢山います。毎年、APUにはこうしたグローバル事業を展開するメジャー企業の採用責任者が大勢訪れています。その数、年間約350社。その目的は何でしょう。それは、国境を越えた友人を作り、切磋琢磨しあった日本人学生／留学生を企業に迎え、組織の明日の活力の中核たる役割を担ってもらうことを期待しているのです。世界約90か国から若者が集うキャンパスは異文化が交じり合



い、独特のエネルギーで満ち溢れています。例えば、キャンパス内に建てられた国際教育寮「APハウス」。およそ1300人の留学生と日本人学生が共同生活を実践しています。寮長やレジデントアシスタント (RA) といった上回生のリーダーシップにより、学生自らが寮生活のルールを作り、日本人を含む多種多様な国籍の若者達が管理運営しています。また、キャンパス内ではカルチュラルウィークというAPUらしい企画が繰り広げられます。日本、インドネシア、アフリカ、バングラデシュ、と各国の学生たちが各々1週間ごとにキャンパス内を各国の文化で彩ります。食堂には当地のメニューが並び、最終日の金曜日は学内大ホールで当該国の民族衣装をまとってのパフォーマンスを繰り広げるグランドフィナーレが行われます。こうした様々なプログラムは全て学生が主体



●資料室

となり、国を超えての協同活動が大前提です。言語はもちろん、文化や価値観が異なる者同士が議論し、自己主張し合い、そして尊重し合いながら物事を進めて行きます。一つ一つの壁を越えていくそのプロセスでは多くのエネルギーが必要とされます。日本人学生達がこうした国々の若者と切磋琢磨する中で、世界を身近に感じ、そして広い視野と複眼的な思考能力を身に付ける様子はそばで見えてとても頼もしいものです。企業人事関係者は今、こうした国籍の違いを越えた共同活動経験を持つ若者を大変に必要としています。日本を飛び出し、世界でビジネスを動かすことは並大抵なことではないだけに、そのダイナミックさやおもしろさ、そして達成感を学生時代に経験した若者に出会うため、人事関係者はAPUへ足を運んでくれています。

APUキャリアオフィスではこうした企業関係者と在学生が接点を持てる場を作るため、様々な学内イベントを実行しています。総合商社、電機メーカー、金融サービス等々、各々業界を代表する企業を連日お招きしての企業説明会を開催しています。その数、多い月では50社以上となります。また年に一度、日本を代表する企業経営者をお招きし、日本の現状と将来を語って頂くトップ講演会を実施しています。他にも企業と大学が協定を結んだインターンシップの実施、国連関係機関から現役国際公務員をお招きしてのリレーセミナー等、在学中の皆さんが多種多様なキャリア構築を目指して準備活動を行える様、全力で支援をしています。これらキャリア支援を通じ、多くの学生が、世界を舞台に事業展開するグローバル企業・団体・機関への就職を果たしています。